

# 幼児の主体性をはぐくむ幼稚園生活をめざして ～自己肯定感、自己有用感を引き出す視点から～ 鹿部町立しかべ幼稚園 学級数3 (園長 福井 伸一)

## I 実践テーマの趣旨

本園の幼児は、自分の思いを表出させて友達と関わって遊ぶ姿は見られるが、自分の力で解決する力や他者を受容、共感する姿勢に課題がある。そこで、研究主題を「幼児の主体性をはぐくむ幼稚園生活をめざして」とし、副主題を「自己肯定感、自己有用感を引き出す視点から」とした。また、遊びの中で幼児が発達する姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児の自己選択や決定、行動を、遊びや生活の中で尊重することにより幼児の主体性が育まれるのではないかと仮説を設定し、実践を進めている。

## II 実践の概要

幼児が主体的に行動するための手立てを工夫していくため、教師間で環境構成と援助の柱を共通理解しながら、日々の保育実践を重ねていくことを大切にしている。

### 1 幼児の自己選択や決定、行動を支えていく環境構成と援助の柱を作成

【環境構成と援助の柱】 ○命や怪我につながることは例外としながらも、基本的に子どもの選択・決定を支えていく。

<環境の構成>

<b>選択の幅を広げる環境物の配置及び生活の流れの構築</b> *遊びに必要な環境物の準備、整理をする。 *遊びの中で過ごす場所の選択の幅を広げることができる室内体制を作る。	<b>見通しをもたせる</b> *選択するために必要な情報を知らせる。 *幼児の経験から引き出す。
---	---



<援助>

<b>受容的態度・言葉</b> *受容することは、認めることや受け入れることと同じであると捉える。 *子どもをよく見て、共感し、理解し、受け入れる。 (声掛け例) 「いいね」「そうなんだ」「そう思ったんだ」 など	<b>選択・決定したことが意識できる言葉掛け</b> *自覚を促し自信につなげる。 *繰り返りの掛けをかける。 (声掛け例) 「OOしようと思ったんだね」「OOしたからうまくいったね」 など	<b>幼児の行動を尊重する</b> *幼児の行動に対して教師が主導的な声掛けをしないようにする。 *やってみようとする思いをもち続けることができるように励ます。 (声掛け例) 「一緒にやってみよう」「一緒にOOする？」 「次に何をしようか」 など
<b>共感</b> *感情に善悪をつけず、怒り、悲しみ、嫉妬なども含めそのまま受け入れる。 (声掛け例) 「怒っているんだね」「悲しいね」 など	<b>褒める</b> *結果のみを褒めるのではなく、過程や意欲も褒める。 (声掛け例) 「そう考えたんですごいね」「やってみようとする気持ちすごいね」 など	<b>提案</b> *気持ちや選択肢、遊びなどのきっかけがもてるような言葉掛けをする。 (声掛け例) 「どんな方法があるか考えてみよう」「一緒にOOする？」 「次に何をしようか」 など

<注意事項>

○比較するような声掛けをしない。 ○「褒める」と「認める」の違いを意識し、バランスよく行う。

#### 【環境構成と援助の柱】

環境構成と援助の柱を保育実践に生かし、事例検証や文献学習を通して幼児の変容を把握しながら、保育につなげている。



#### 【1日のスケジュールの視覚化】

### 2 異年齢児との関わりを深める活動の工夫～縦割り保育の実施～

「しかべ幼稚園なかよしデー」と称し、全園児が3グループに分かれて活動している。幼児が他者から肯定的に受け止められる喜びを味わうこと、自分が他の人の役に立っているという気持ちをもつことをねらいとし、生活の流れや活動の内容について各グループで話し合い、異年齢児が関わることのできるような環境に配慮し、実施している。



【はじめますの会の様子】



【散歩へ出かけた時の様子】



【年長児が絵本を読んであげている様子】

## III 実践の成果 (○) と課題 (●)

- 幼児の言葉を大切に受け止め、教師がその思いや考えに寄り添っていくことや、自己判断できるように働きかけ、自発的な活動を支えていくことで、幼児の主体性につながることを実感できた。また、主体的に遊ぶことにより、遊びの内容の広がりにもつながった。
- 「しかべ幼稚園なかよしデー」に継続的に取り組むことで、普段の生活の中でも積極的に異年齢児と関わる姿が見られるようになり、自己有用感を感じている場も増えた。また、本取組で得られた情報を、教師間で交流をすることで、多角的な視点で幼児を捉えることにつながった。
- 自己肯定感を高められるように、幼児一人一人の発達や個人差などに留意し、幼児の気持ちに寄り添い、より共感するなど、幼児が多様に心を動かす体験ができるようにしていく必要がある。



# 全保育者が意見を出し合い、日常の保育の充実を図る園内研修の促進

認定こども園美深町幼児センター (センター長 田澤 満)

## I 実践の趣旨

本園では、研究主題『自分の思いや考えを表現し、いきいきと遊ぶ子ども』を目指して」の実現に向け、園児への援助の方法や環境構成などを視点に、全保育者が共通理解を図り園児の成長を支援するとともに、保育者一人一人の資質向上につなげられるよう園内研修の充実に努めている。

## II 実践の概要

研修の機会は、年間4回の「園内研究会」と月に一度の「事例研修」、「研究主題に関する話し合い」であり、研究主題を基に、日常の保育の充実に向け教職員の研修の機会を定期的で開催し、保育内容の検討及び改善を図っている。

### 1 園内研究会

年間4回、保育部(0~2歳児)、幼稚部(3~5歳児)で実施している。園内研究会では、幼児期の終わりまでに育てたい10の姿を踏まえ、学級の目指す姿の実現に向けた指導案を作成し、参観保育を実施している。参観保育後には、参観保育で見られた園児の姿と幼児期の終わりまでに育てたい10の姿や学級の目指す姿にどのようにつながり、園児への援助や環境構成が効果的であったのかについて協議している。そして、参観者の意見を次の保育へ生かしている。保育者同士がお互いの保育を見合う大切な機会であり、保育者としての資質向上につながっている。

### 2 事例研修

研究主題に基づいた保育内容で、学級ごとに保育者の援助が効果的であった事例及び課題が残る事例の2パターンのエピソードを基に事例検討を行っている。その際、様々な視点から意見を集約できるよう4~5人程度の小グループを編成し、付箋紙を用いて全保育者の意見を反映している。各グループで話し合った内容は、全保育者で回覧し、日常の保育に生かせるようにしている。

### 3 研究主題に関する話し合い

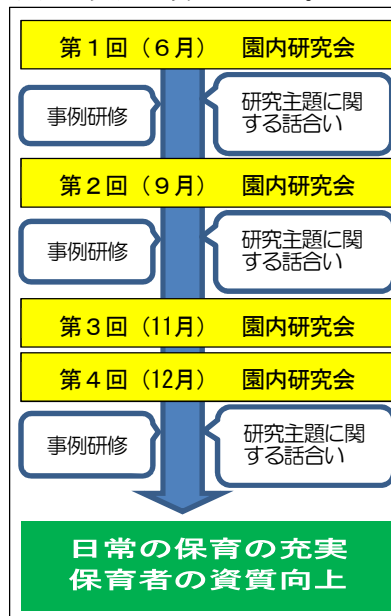
保育者の援助や環境構成について、幼稚部と保育部それぞれの話し合いを定期的で開催している。この機会では、普段は研修に参加することが難しい副担任なども参加し、意見を出し合って共通理解を図ることができ、有意義な時間となっている。

### 4 その他

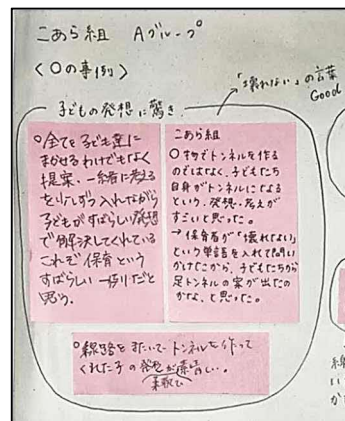
毎回の研修後にはアンケートを実施し、評価や意見を踏まえて次回の研修に役立てるとともに、研修内容やアンケート調査などを代替保育者にも周知し、意見をもらえるようにしている。

## III 成果(○)と課題(●)

- 他の保育者の保育を参観したり、研究協議等で様々な意見を聞いたりする機会を確保することで、自身の保育を見直し、日常の保育の改善へつながるヒントを得ることができ、保育者の資質向上に役立っている。
- 多様な機会で保育者が意見を出せる環境を整えることで、様々な視点を得ることができるとともに、それを周知することで一人一人が研究主題についての意識を高め、全保育者が一丸となって研修に取り組むことができている。
- 限られた時間の中で十分な話し合いができないこともあるため、短時間で意見を出し合い、深めることができる研修の進め方を今後も検討する必要がある。



【園内研修の計画】



【付箋紙を活用した事例検討の一部】

幼児の主体的な活動としての遊びを支える保育者の役割を探る  
 ～思いを伝え合い、関わりを深める活動に向けた援助の工夫を通して～  
 釧路市立阿寒幼稚園 学級数3 (園長 山崎 綾子)

I 実践テーマの趣旨

本園の幼児は、自分の思いを素直に表現して遊ぶが、友だちに自分の考えを伝えたり、互いの気持ちを受け入れ、コミュニケーションを取りながら遊んだりすることを苦手としている様子が見られた。

そこで、対話する楽しさを味わい、コミュニケーション力を培うため、研究主題を「幼児の主体的な活動としての遊びを支える保育者の役割を探る」と設定し、友だちと思いを伝え合い、関わりを深め、主体的に遊びを展開していくための保育者の役割について、研究を推進している。

II 実践の概要

七夕祭りの実践事例

課題と思われる 幼児の姿	活動の流れ・幼児の変容	保育者の具体的な働きかけ
<p>1 幼児が思いを伝え合うための援助                      保育者は、縁日のイメージを共有し、幼児同士が思いを伝え合うための援助を行った。</p>	<p>&lt;事前の話合いの場面&gt;</p>  <p>イメージしたことを友だちと共有しながら、縁日に必要なものを考える姿が見られた。</p>	<p>紙芝居や絵本を用いて縁日の具体を想像させたり、「〇〇のお店のことなら、Aちゃんが知ってるよ。」と声をかけたりするなど幼児同士が思いを伝え合うよう働きかけた。</p>
<p>2 幼児が関わり合うための援助                      保育者は、幼児が気付いたことや困っていることなどを話し合い、互いに関わり合うための援助を行った。</p>	<p>&lt;準備の場面&gt;</p>  <p>友だちの得意なことに気づき、つくり方を教えてもらいながら一緒につくる姿が見られた。</p>	<p>保育者は、幼児の言葉を聞き逃さないように注意しながら、「Bくんはテープを貼るのが上手だね」と幼児一人一人の得意なことを全体で共有したり、「Cちゃんのつくった金魚、本物みたいだね。どうやってつくったの。」と相談する姿を見せたりするなど、幼児が関わり合うよう働きかけた。</p>
<p>3 幼児の主体性を高めるための援助                      保育者は、幼児同士の関わりを見守り、困り感を伝えてきたときのみ援助を行った。</p>	<p>&lt;当日&gt;</p>  <p>自分たちでつくったものを見せ合ったり、上手にできたことを伝え合ったりするなど、友だちを誘い、みんなで遊びを楽しむ姿が見られた。</p>	<p>保育者は、幼児が自分たちで遊びを広げていくことができるよう、活動の様子を見守り、困り感を伝えてきたときは、幼児がつくったものを説明したり、お店屋さんになりきって「いらっしゃいませ」などの声がけを考えさせたりするよう働きかけた。</p>

III 成果と課題

- 保育者が、幼児理解に基づいた援助を効果的に行うことにより、縁日の具体的なイメージを幼児がもち、自分の思いを伝えながら関わり合うなど、家庭環境や生活経験が異なる幼児一人一人のイメージを大切にしながら、活動を充実させることができた。
- 幼児が気付いたことや工夫したこと、困っていることなど、友だちに自分の考えを伝え、話し合うことができるよう援助することにより、幼児が自分の考えを伝える楽しさや友だちの話を聞く楽しさ、伝わる喜びなどを感じられており、自由に自分なりの表現ができる喜びが、対話する力を培う上で大切であった。
- 幼児の遊びに対し、保育者がイメージの押し付けや方向性の限定を行わず、幼児の実態を見極めて援助を考えるなど、幼児の主体性と保育者の意図のバランスを取り、幼児の主体性を引き出しながら幼児同士の関係が豊かになっていくことができるよう、保育者の資質・能力の向上を図る必要がある。